

母と娘  
— その光と闇 —

國 吉 知 子

Mother and Daughter Relationships — Light and Darkness —

KUNIYOSHI Tomoko

---

神戸女学院大学 人間科学部 心理・行動科学科 教授

連絡先：國吉知子 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学人間科学部  
kuniyoshi@mail.kobe-c.ac.jp

## Summary

The theme of mother and daughter relationships are familiar, however, these relationships contain many complex psychological factors. Recently, the increasing phenomenon of an overly intimate mother and daughter relationship, which is influenced by the declining number of children, has come into focus as a common family problem. However, we can find the same kind of relationship in many old tales and ancient myths. In this article, I first reviewed two survey-based psychological studies, which suggested that some daughters have a life-long dependency on their mothers, and that 62% of daughters have a tendency to depend on their mothers. Secondly, I assessed the strength of the bonds shared between mothers and daughters from the perspective of Depth Psychology. I also pointed out the difficulty of a daughter's separation and independence in a typical mother/daughter relationship, as can be seen in myths and Disney animations such as Snow White, Tangled, Little Mermaid 2, Brave, and Frozen. Lastly, to understand these phenomena, I introduced the theory of Saito (2008), who explained that mothers use ego-defense mechanisms, such as suppression and identification, to control their daughters. I also discussed the role of a mother's devotion from the theory of the "masochistic-control mechanism", which was developed by Takaishi (1997). I then described a way of coping with this unconscious control from mothers. In conclusion, I emphasized that there is a necessity for a new and more suitable model for a woman's original process of gaining independence, which is rather different from that of most men.

**Keywords:** mother and daughter relationships, independence of women,

Depth psychology, family system, masochistic control mechanism,  
Disney animation

## 要 旨

母と娘の関係性は身近なテーマであるが、心理学的な複雑さを内包している。近年では少子化の影響を受け、一卵性母娘など母娘の問題が家族の問題としてクローズアップされているが、実は童話や神話の中にも母娘のテーマは表現されている。本稿は、まず娘の母親への生涯にわたる依存性の高さと、62%の女性が母親に依存的であるという質問紙を用いた実証的研究を概観した。次に、深層心理学的観点から、母と娘に特有の親密性の高さと娘の自立の困難さについて、神話やディズニー素材（「白雪姫」「ラプンツェル」「リトルマーメイド2」「メリダとおそろしの森」「アナと雪の女王」）を取り上げ、それぞれの物語における母娘関係を分析し、これらに共通する興味深いパターンと、母娘の絆がいかに強く分離しにくいかを示した。さらに、母娘関係を深く理解するために、母親が娘をコントロールする無意識的メカニズム、すなわち、抑圧、同一化という自我の防衛機制や「母」役割が持つ献身の問題（斎藤，2008）を紹介した。特に、献身の問題については、マゾヒスティック・コントロール（高石，1997）の観点から論じ、その対処について述べた。その結果、女性の自立を考えるには、従来の男性の自立モデルとは異なる、女性特有の自立スタイルを考えることが重要であることが示唆された。

**キーワード：**母娘関係、女性の自立、深層心理学、家族システム、マゾヒスティック・コントロール、ディズニー作品

# I. はじめに

## 1. 本稿の視座

母と娘のテーマは古くて新しい。近年では少子化の影響を受け、虐待やネグレクトなど、親子の距離の取り方が難しくなっている。また子どもの自立の問題が青年期以降にも遷延し、特に、青年期以降の娘と母の問題としては、「一卵性母娘」など、すでに成人を過ぎた娘と母がまるで姉妹のように非常に親密な関係を結び、相互依存する現象が出現している（信田，1997）。心理学において、この「一卵性母娘」という母娘間の過度な密着状態を捉えようとする試みは多いものの、質問紙レベルでは、「母娘の親密さ」と「過度な密着」を区別することはなかなか容易ではない。特に本学のような女子大学、しかも比較的良い家庭環境にある母と娘は親子関係が良好で親密度が高く、互いにその関係に満足していることが多いため、仮に母子密着の問題があったとしても見えにくい状況になっているだけに、なおさら質問紙には表れにくい。このように、母娘関係というものは、意識的にその状況を捉え、一元的に議論することが非常に難しい要素を抱えている。本稿サブタイトルの「光と闇」とは、母娘関係の光の背後にある、闇に覆われた深淵の存在を示唆するものである。その深い闇の中には何が存在するのだろうか。

深層心理学の領域に目を向けてみると、童話や神話の中に母娘のテーマは繰り返し表現されている。本稿では、深層心理学的観点から、母と娘に特有の親密性の高さや娘の（息子とは異なる）自立の困難さについて、神話やディズニー素材を通して考察してみたい。物語ではどのような形で母と娘の関係が切り結ばれているかを検討することを通して、より深層レベルでの母と娘の関係性を知ることが可能となるだろう。なお、本稿でディズニー素材を扱う理由についてであるが、ディズニー素材はその現代的脚色から、オリジナルを正確に伝えているとは言い難く、一様にハッピーエンドで終わる予定調和的パターンなど、皮相的、偏った価値観の押しつけである、との批判もされる。しかし、元来、童話とはその折々の時代の価値観や地域性を反映して伝承され、受容さ

れてきたものである。その意味では、ディズニー版のストーリーもまた現代的課題を昔話に反映させているとも言え、「現代の童話」として今日の現象を読み取るうえでは意味があると考えた。また、現代においては、映画や絵本などに登場するディズニー版キャラクターやストーリーの認知度が高い。つまり、現代の多くの子ども（大人も）が多かれ少なかれディズニー版ストーリーから影響を受けていると考えられることから、現代の「母と娘」を理解するうえで利用価値があるのではないかと考え、取り上げることにした。

## II. 依存しあう娘と母親

### 1. 母の分身としての娘

母と娘と一口に言っても、さまざまなスタイルがある。例えば「一卵性母娘」や「母子カプセル」などの言葉に表されるような、母娘関係の距離が非常に近く濃密であるものや、一方、娘の反抗が強く、いがみ合う母娘、家庭に居つかない娘も存在する。さらに、母親が娘に対してジェラシーのような感情を抱き、娘を可愛く思えないというケースも存在する。しかしながら、これらは、異なる母娘関係のようにみえるものの、（その現れ方は異なれども、）いずれも母子関係の強さ、密接さが根底にあっての反応であると言うことができる。娘の反抗が強い場合も、たいていの場合、母親の有形無形の干渉や期待を感じ取り、息苦しさを感じての行動化であることが多く、娘は反発しながらも、ありのままの自分を母親に受容されたいという願いがその根本にある。もし親に対する期待が娘に皆無であるならば、親に対して受容を求める気持ちもないはずで、娘は親の存在を完全に無視すればすむ話である。単に行動の表出ベクトルの方向が逆であるだけで、反抗も過剰適応も同じ状況の表裏にすぎない。また、年頃の娘へのジェラシーや、さらに、幼い娘を可愛く思えないという子育て中の母親の心理もまた、娘への過度な同一視が根底にあると考えられる。

人は誰でも、その心の深層に「インナーチャイルド（内なる子ども）」というイメージを有しているとされる。インナーチャイルドとは、過去の子ども時代の傷つき体験の外在化イメージとして捉えることも可能であろう。心理学の

流派を超えて、類似の概念は存在し、例えば、交流分析理論における「子どもの自我状態」は、年齢を問わず、あらゆる人が持つ心の機能の一つとされている。このように、たとえ大人であっても、人はその心に「子ども心」を持つ。娘を可愛いと思えない母親は、ある意味、母親自身の「インナーチャイルド」が傷ついており、インナーチャイルドが実際の母親自身の子どもと競ってしまう状態と解釈することも可能である。娘は同性であるだけに、母親のインナーチャイルドが実娘にジェラシーを抱きやすいと言うこともできよう。このように、表面的に顕在化するスタイルはさまざまであっても、母と娘の関係の根は、同性同士の分離の難しさにあることが推測できる。

## 2. 母親の分離不安と娘の母親への依存

母娘の「密着」について無自覚であるのは、一般的に母親の方である。例えば、ライフサイクル的に見ても、娘が自立する頃（20歳前後）の母親というのは、だいたい50歳前後と考えられるが、ちょうどそのあたりの時期、母親は更年期にさしかかる。閉経、ホルモンバランスの変化など、心身に大きな変化が訪れる。自律神経の失調のみならず、容色の衰え、老いの兆候など「女性機能の喪失」を体験する。その一方で、母親として心血を注ぎ庇護してきた子どもが徐々に巣立っていく「エンプティネスト」の時期でもあり、これまでの母親役割が終焉し、軌道修正が求められ「人生後半の課題」に直面せざるを得ない時期である。つまり、この時期の母親は、心身ともに不安定となりがちなため不安が増大しやすく、他者へのしがみつきが生じやすい状態であると言える。母親自身が心理的に自立、安定し、パートナーとの関係を再構築し、新たな自分の人生後半の価値の創出に成功する場合はよいが、もしその段階で滞りが生じてしまった場合、意識レベルでは娘の自立を求め、「よい就職やよい結婚」を応援しながらも、無意識レベルでは娘を手放すことへの抵抗が生じやすい。そのような母親は内的葛藤が強まり、往々にして、その「分離不安」的の心性から、息子よりも対象操作しやすい娘を取り込む行動をとりがちである。そのような母親の矛盾した態度に疑問や違和感を覚えるのはたいてい娘の

側である。この時、娘が母親を受容する場合、娘は母親と親密な関係を結び、極端な場合は一卵性母娘の様相を呈するに至るまでになる。一方、娘が母親の無意識的重圧を不快と感じる場合は、反発や早すぎる家庭からの離脱などにより母親と距離をとることになる。なお、娘が自らの人生における選択を、母親を尊重しつつも、主体的、自律的に行うことができる場合は、母娘の分離が成功したと考えてよいだろう。あくまでも上述の例は、この時期、母娘関係に危険性が高まる時期であると指摘するものにすぎず、すべてのケースで母親の分離不安が娘の自立を阻害するわけではない。その点に注意して個々の母娘を見ていく必要がある。

このように母親側に分離不安が強まる一方、娘の方も母親に対して依存的な態度を示しがちである。渡辺（1997；2004）によれば、親子間の発達の様相には男女差があり、娘の母親への依存は、娘が高校生から50代に至るまでどの世代においても顕著に高いとしている。この理由として、渡辺は、母と息子は性差という生物学的差異があり、母親は息子の中に自分と違う他者を発見し、さらに息子は母の世界から出ることによって性同一性を得る。母娘関係の場合では、娘が個としてのアイデンティティを手に入れるためには母との同一化から脱出しなければならないが、娘が性同一性を確立するためには母親との同一化が不可欠である、という橋本（2000）の説を援用している。すなわち、娘の心理的発達には母との大きな心理的葛藤が存在するため、女性の方が母親との心理的分離が困難になりやすく、それが娘の側の依存的態度を引き出しやすくなっていると考えられる。もっとも、何らかの理由により、母と息子の母子分離に問題が生じた場合のダメージは、母娘の場合よりも大きいと言っている臨床事例にも筆者は遭遇してきているので、息子の場合であれば常にスムーズに分離が進むというわけではない。

藤田・岡本（2010）は、女子大学生を対象に母と娘の関係について、母娘関係尺度（藤原・伊藤，2007）のクラスター分析より4類型を抽出しその構成比を示しているが、それによると、「従属群」（母娘の過去の対立が強く、現在は母に服従し依存的）22.6%、「希薄群」（過去の対立は弱く、母への肯定感の中

程度) 22.6%、「依存群」(過去の対立が弱く、現在の母への強い信頼感と愛着) 42.1%、「離反群」(過去の対立強く、現在の母への弱い信頼感) 12.6%となっている。過去の対立はどうあれ、現在、母親に強い信頼感や依存性を示している「従属群」と「依存群」を合計すると約64%となり、半数以上の娘は母親に依存的態度を示していること、母親と離反しているのは1割強にすぎないことがわかる。このように、母と娘という関係自体、相互依存的になりやすい素地を持っていることが推測される。

### Ⅲ. さまざまな素材にみる母と娘

ここでは、深層心理学、特にユング派に倣い、昔話や神話に人間の集合的無意識(普遍的要素)が反映されていると考え、それらを研究素材として取り上げる。昔話や神話はいわば「物語」であり、物語を通して、人は心の元型を知ることができる。カウンセリングもまた、自分の「語り(物語)」を通して、新たな「私の物語」を創造するものである。母と娘の関係について「神話」や「現代のおとぎ話」と言えるディズニー映画に表れる母娘の姿を事例と考え、より具体的に検討してみたい。

#### 1. 神話にみる母と娘の関係

母と娘の関係が表される有名な神話は、何と言っても「デメテルとコレー(ペルセポネー/プロセルピナ)」であろう。あまりにもよく知られた神話ではあるが、以下に簡単にあらすじを示す。

デメテル(母)とコレー(娘)は仲の良い母娘であったが、冥界神ハデスがコレーに恋し、ゼウス(父)の協力のもとコレーを略奪。母デメテル(豊穡の女神)の娘を失った悲しみはあまりにも強く、作物は枯れ果て、世界は荒廃する。困った人々がゼウスに懇願したため、最終的にコレーは冥界から戻ってくるが、コレーは黄泉の国で柘榴の実を食してしまったことにより、食べた粒の月数は冥界で過ごすことになる。コレー不在の期間は母の嘆きが大きく、作物が実らない冬となった。



この神話には、母と娘の結びつきの強さと母の娘喪失のショックの大きさ、つまり母娘の完全分離の難しさが描かれている。さらに、この強力な母娘の結びつきの切断は、男性（ハデスとゼウス）による一種暴力的な侵入（略奪）をもってしても完全には成し遂げ得ないことがわかる。しかしながら、この神話で筆者が特に興味深いと感じるのは、実は娘コレーの側の態度（行動）である。母と結びつきの強い娘コレーに注目すると、一見コレー自身の考えは明確に描かれておらず、受け身で明確な意図を持たないように見える。だが、最終的に娘コレーは何を得たのだろうかという視点で再度この神話を見なおした場合、実は、コレーは母親も配偶者（ハデス）も、都合よく両方手に入れていることに気づく。柘榴の実を食べたのも自らの意志ではなく、ハデスに唆されてのこととされている。すべてのことはコレーの意思とは関係のない形で行われたのかもしれない。しかし、実はコレー自身の無抵抗という（暗黙の）了解がなければすべては起こりえなかったのではないか。（もちろん、筆者には略奪という行為を矮小化する意図は全くない。）図1はロセッティによる「プロセルピナ」という絵画である。プロセルピナとはコレーの別名であるが、この絵に描かれたプロセルピナの確信犯的な表情を見ると、筆者のそのような想像もあながち否定できないのではないかという気がしてくる。なぜなら、母親のもとを行き来し「娘」を満喫しつつも、配偶者ハデスの横で黄泉の女王として君臨したのはコレー自身であるからだ。ロセッティも同じ想いを抱いてこの絵を描いたのではなかろうか。また、コレーの姿は、結婚しても実家とのつながりが強い、現代の娘の姿をも彷彿とさせる。原田（2006）の実態調査によれば、近年では、結婚後も実家の親と近い距離に住むことを選択し、特に子育て時期に実家から援助を引き出す娘が増えているという。デメテルとコレーの神話からは、このように、結婚してもなお合法的に母親に依存し続ける、娘の側の母親への“巧妙な”依存性も読み取ることができるのである。

## 2. ディズニー素材にみる母と娘

次に、ディズニー映画を取り上げて母と娘の関係を考えてみたい。実はディズニー映画において母と娘を中心に扱っている題材はそれほど多くない。ディズニークラシックのプリンセス関連作品では、白雪姫以外に、シンデレラ、眠れる森の美女が存在するが、それ以外にはみられない。リトルマーメイド以降の作品でも表だって母娘関係を取り上げているものは少ない。ここでは、まず、代表的なプリンセス作品として「白雪姫」を取り上げたが、これについては、中心的要素の改変が少ないため、グリム版もともに参照しつつ考察したい。なお、現代の母娘関係を検討するうえでは、やはり近年の作品をみていくことが必要と考え、ディズニー第二黄金期(1989年)以降の作品群から「リトルマーメイド2」「塔の上のラプンツェル」「メリダとおそろしの森」「アナと雪の女王」の4作品を取り上げた。リトルマーメイド以降の作品で母娘を取り上げていると考えられるのは、現在この4作品のみである。これらは、オリジナルから大きく改変が加えられているため、オリジナルとは別の物語と考え、ディズニー版のみを取り上げて検討する。



図1. 「プロセルピナ」  
(ロッセッティ画 1874年)

### (1) 白雪姫(1937年制作)：母親の娘への羨望

言わずと知れたグリム童話をもとにした作品であり、世界初のカラー長編アニメーション映画としてアニメ史に残る傑作と高く評価されている。ディズ

ニー版では、娘の継母への復讐場面の削除、冒頭場面での王子との出会いの挿入、小人のキャラクター化などの改変はされているものの、白雪姫の原作の骨子はほぼそのまま生かされている。すなわち、美しくなった娘への母の羨望と殺意がテーマであり中心となるプロットは同じである。よって、グリム版も含めた形で考察を進める。白雪姫の母親は「鏡」に誰が一番美しいかを尋ねるが、所詮、鏡に映るものとは自身の投影である。「あなたが一番美しい」との鏡の答えは自問自答、「自己愛」にすぎない（実際、鏡は自己愛の象徴でもある）。鏡に映るものは実体ではなく虚像であり、ここでは中年期以降の母親の空虚さを表現していると考えられよう。また、娘を殺める手段に「毒リング」を選ぶところも、すこぶる母性的である。リングとは聖書のアダムとイブのエピソードからも知られるように「意識」や「知恵」の象徴でもある。それに毒を仕込むということは、娘の「意識の成長（＝自立）」を阻むことを意味する。しかも、リングという食べ物（食べ物＝母の与えるもの＝愛情）を殺害手段とする点も母性性のネガティブな側面を象徴的に示していると考えられる。

さらにグリム版も参照するならば、母は「娘の肝」を食べるが、娘を取り込むことで若さを維持し自らの優位を保とうとする「一卵性母娘」の母親の姿を思い起こさせる。最後、白雪姫は母親に壮絶な復讐をする（結婚式に母親を招待し、焼けた鉄の靴を履かせて殺す）が、結婚式すなわち母からの自立（母子分離）が母親にとっても娘にとってもいかに心理的に大変な事態であるかが伺える。娘との分離は、母親にとって死に値する恐ろしい痛みを伴うものなのであろう。また、これは筆者の連想であるが、白雪姫とは娘の視点から見れば「自分が母親よりも美しくなったから殺される」という娘側の「被害妄想」の物語と読むこともできる。ディズニー版では14歳と設定されているが、グリム版によれば、この時白雪姫は7歳である。現実的に考えると、たった7歳の幼女に母親が「自分より美しい」と妬み、殺意を抱くだろうか？ 筆者の臨床経験であるが、6歳前後から小学校低学年頃にかけて、女兒は母親に対して、軽い敵意のような気持ちを抱く時期があるように思う（エレクトラ・コンプレックスと関係するかもしれない）。その時期を経て、娘の親密対象は母親から同性

の友人へと徐々に移行するのだが、7歳とはまさにその時期にあたる。そこから推測するならば、白雪姫とは少女が抱く母親への敵意を（母親への投影性同一視の形で）描いた物語と解釈することもできよう。このように白雪姫とは、合わせ鏡のような母娘関係が描かれている物語と考えられる。

## （2）塔の上のラプンツェル（2010年制作）：娘の自立を阻む母

グリム童話「ラプンツェル」をもとに、内容を大幅に改変して作られたディズニー映画である。あらすじを以下に簡単に示す。

王女として生まれたラプンツェルは誘拐され、自分の素性を知らぬまま継母のゴートルに塔の最上階に閉じ込められて育つ。ゴートルは彼女に、外は恐ろしく自分の傍にいる限り安全と刷り込む。実は彼女のブロンドの長髪には魔法が宿っており、ゴートルはその力で若さを保っていた。王と王妃は娘を案じ毎年誕生日に多数のランタンを空に放つ。窓から眺めるラプンツェルはランタンに興味を持ち、外の世界に出たいと願うようになる。そこに盗賊のフリン・ライダーが塔に迷い込み彼女と出会う。ラプンツェルはフリンに頼み、外に連れ出してもらうなかで彼と恋に落ちる。ゴートルに連れ戻されたラプンツェルは記憶を取り戻し反発するが再び幽閉される。ゴートルに瀕死の重傷を負わされたフリンを助けるためラプンツェルは永遠に傍にいると継母に約束するが、フリンはラプンツェルの髪を切り、彼女を拘束する原因の髪の魔力を封じ息絶える。ゴートルもラプンツェルの魔法が消えたため本来の老婆に戻り絶命する。フリンの死を嘆くラプンツェルの涙に再び魔法が宿りフリンは甦る。ラプンツェルは城に戻り、本当の父母のもとでフリンとともに幸せに暮らす。

母親が娘を取り込み、自立を阻害する姿が端的に描かれている作品である。母親は娘と密着している限り永遠の若さ（生命）を維持できる。娘の疑問（外界への憧れ）は自我の芽生えを示すが、それは母親の価値観から一旦脱中心化

し、自らのオリジン（自分は何者か）を問うことでもある。ラプンツェルの場合、コレーと同様、母子分離はフリンという男性（しかも盗賊！）の侵入によって半ば成功するが、最終的にはフリンの命という大きな犠牲なしには成し遂げられないのである。また、ラプンツェルの場合、親元を離れ、小人と暮らし、最終的に王子の元に嫁ぐ白雪姫とは異なり、実の親元に戻る形で終わっている。すなわち、悪い母親からは離脱したものの、良い母親と再び結合している点では完全な母子分離とは言い難い。

### （3）リトルマーメイド2 Return to the Sea（2000年制作）

：母から娘への世代間伝達と娘の異質性の価値

「リトルマーメイド」はディズニー第2黄金期の原点といわれるヒット作品で、アンデルセンの人魚姫をもとにした作品であるが、主人公アリエルが最終的には人間の王子エリックと首尾よく結ばれるなど、こちらも悲劇に終わる原作から大きく改変されている。また、母親は登場せず（アースラという海の魔女が登場）、主に父親トリトン王との父娘葛藤が中心に描かれている。一方、本稿で取り上げる「リトルマーメイド2」は事後エピソードを描いたOVA作品であるが、エリックと結婚し陸の王妃となったアリエルとその愛娘メロディ（海と陸をつなぐ存在）との母娘の対立と和解が示されている。あらすじを以下に示す。

アリエルの娘メロディは海の帝王トリトンの孫娘であるが、トリトンの王位を狙うモルガナに生命を狙われたため、トリトンの孫である記憶や海の世界への出入りを母親アリエルにより封印されてしまう。しかし活発な少女に育ったメロディは泳ぎの達人で海に強い憧れを抱き（世代間伝達）アリエルに猛反発する。その隙をモルガナに狙われ、メロディは囚われ、トリトンは失脚に追い込まれる。人魚に戻ったアリエルは娘を助けに海の王国に戻るが、その姿を見たメロディは母の秘密を知り、強いショックを受け反発を増しトリトン王の銚（力の源）をモルガナに与えてしまう。王の力を得たモル

ガナによりすべての人魚が絶体絶命に陥ったその時、人間には鉾の力が及ばないことに気づいたメロディは間一髪で鉾を取り戻し、モルガナは滅ぼされる。海の世界に平和が戻り、アリエルはメロディと和解し国に帰る。海と陸の壁は取り払われメロディや海と陸の住人に自由が戻る。

少女メロディは何かと呼ばれるように禁じられた海に憧れ、接近するが、それはかつて母アリエルが陸に憧れたのと相似形である。ここに母と娘の結びつきの強さを見るとともに、親の問題が無意識裡に同性の子に伝承され再演される世代間伝達が示されている。(たとえ事実を知らされていなくても、子どもはその家族の問題を解決するべく無意識的に駆り立てられることが多い。子どもの問題行動はそのような家族臨床的視点からも理解できる。)メロディは生命を狙われているため、母アリエルは娘が海に近づくことを禁じ、その記憶まで封印する。これは娘の安全を願ってのことではあるが、母親による自立阻止とも言う。 (ジェンダーステレオタイプという視点からみると、ラプンツェルや眠り姫などもそうであるが、男性とは異なり、女性に対して外の世界に出ることを禁止するテーマが多い。冒険に出るのは決まって王子であり、自由を拘束されるのは姫である。そして、悪と戦い、姫の拘束を解く役割を王子が担っている。成功すれば王子と姫は結ばれる。これが一般的な「自立」のモチーフである。)しかし意志の強いメロディはその禁に屈しない。彼女は禁を破り海に出かけ、母と激しい対立をして母を否定する。その結果、海(母の世界)は崩壊寸前の危機に陥る。(母と娘の分離が世界の危機を招くという点では、デメテルとコレーの神話と共通する。)しかし最後は、(人魚の要素を持ちつつも)人間であるメロディの「母との異質性」が問題解決の鍵となり、母(と母の世界)を救う点がこの話の眼目と言えよう。つまり、母親が自分とは異なる「娘独自の価値」を発見し、認め、受容していくことが、母親や家族全体にとって大きな救いをもたらすことが暗示されている。これは、家族システムの視点から見ても興味深い。そして、ここでも主人公は(幼いためではあるが)母の元に帰ることを自ら選んでいる。

#### (4) メリダとおそろしの森 (2012年制作)

：「完璧な母」に対する思春期の娘の壮絶な反抗

ディズニー系列のピクサー社が初めて女性を主人公として制作した話題作で、第85回アカデミー賞長編アニメ映画賞を受賞するなど好評であったが、日本では人気が出ず、興行収入では日本公開ピクサー作品の最低記録となった。それにはさまざまな理由が考えられるが、一つには、思春期の娘の母への敵意があまりにも露骨に描かれていたため、母性に対する価値評価の高い日本では共感が得られにくかったことが関係しているのではないかと筆者は推測している。舞台は10世紀頃のスコットランドという設定である。あらすじを以下に示す。

王女メリダは野生児で弓の名手で活発な少女であったが、女性らしさや結婚を強要するプライドの高い「完璧な母」エリノア王妃に反発心を持っていた。メリダの夫を決めるための武勇競技会に、結婚を嫌うメリダ自ら優勝し、競技会をぶち壊してしまったことで母と口論となり、メリダは母の大切なタペストリーを切り裂き、城を飛び出す。さらに、復讐心から依頼した魔女により（彼女の意図とは反して）母親を熊に変えてしまう。しかし熊（この家のトラウマの象徴である）を嫌う父ファーガス王に見つかれば熊の姿の母は殺されてしまうため、メリダは母とともに森に魔法を解く手がかりを探しに行く。熊になっても上品な態度を維持する母親に野性的なサバイバル術を教えることでメリダは徐々に優越性を獲得し、母の価値観の完全否定に成功する。様々な危険を乗り越え母親は娘の知恵と力に気づき、両者の気持ちが融和し始める。娘は母を元の姿に戻そうと試みるが失敗。父は母を敵熊と勘違いし攻撃する。そこに真の敵熊が登場しメリダを襲う。母（熊）は最後まで娘と夫を守り、王家のトラウマの源である敵熊を仕留め、ようやく母の魔法が解ける。娘はそこで初めて母に謝罪する。母と娘は和解し、二人は新しい関係を築く。

この映画は、観る者の視点が思春期の娘メリダ側にあるか母親側にあるかで評価が大きく異なる。娘の思春期心性に共感できる人は、メリダのすさまじい母親への憎悪が心底理解できるだろう。一方、母親側に視点を置いて観ると、母親が気の毒に思える場面が多いため、この映画の真価が見失われてしまう可能性がある。エリノア王妃は非常に賢明で非の打ちどころのない母親（女性）である。言うことはすべて正論で完璧、重要な決定は彼女の考えでなされる。王ファーガスも、知性と品位の高いエリノアには頭が上がらず、メリダの三つ子の弟たちは幼稚で極端にだらしなく問題児揃いである。母親が強くなりすぎ、家族システムに歪みが出ている状態と言えよう（父は熊に襲われ左足を失っており、「父親」が十分機能していないことが象徴的に示されている）。それほどまでに「強大で無敵の母」にどうあがいても太刀打ちできない娘が、母をどのように超えていけるのか、この映画はそのプロセスの過酷さ、熾烈さのみごとに描きつつ、その深淵な問いに一つの答えを提示しようとしている。また、娘の、母親を超え、母の古い価値観を壊したいという一念が、結果的にこの家を長年苦しめて来たトラウマから解放する動因となっている。すなわち、子どもが（意図せずに）家族の機能不全を救う動きをすることが示唆されており、これも家族システム論と一致する。またこの物語では、母と娘が互いに「影」となっており、互いの価値観を相容れない真逆の存在として描かれている。同一化対象となるべき母親が自らの本質と大きく異なる時の娘の葛藤の大きさ、悩みの深さは想像を絶する。まさに娘にとって母親は熊のように大きく立ちほだかり、意思疎通もままならず、棲む世界も異なる異形の存在に映るであろう。両者が歩み寄るには、母エリノアが熊となり、まず「人としての体面を捨てる」ことが必要であった。そうして母はようやく娘の知恵（異なる価値観）に気づき、娘を最後まで受容しつづける「忍耐強い母」へと変容することができた。システムック・コンステレーション（Hellinger, B. が創始した家族療法）理論によれば、親子において与えるべきは親の側であるとされる。つまり、先に手を差し延べるのは親でなければならないのだ。この理不尽な行動をとる娘に対して、親が「親としてあるべき姿」を貫き通すという極めて困難な



課題を熊になったエレノアは見事にやり遂げた。ちなみに、映画中にタペストリーが重要なアイテムとして描かれているが、タペストリーは縦糸と横糸（二者）が絡み合う織物であり、二人の「絆」を象徴するものである。（実際、映画ではタペストリーに母と娘の姿が織られている。）それをメリダは切り裂く。つまり母娘の絆を傷つけ、絆を切断しようとする暴挙に出る。最後のシーンで、このタペストリーは人間に戻った母エレノアの裸身を包む布として用いられるが、まるで生まれ変わった母親を包む産着のようでもある。母と子の絆とはタペストリーのように飾っておくものではなく、常に母娘の身にあるべき（保持すべき）ものなのだろう。母親を熊にしたり、絆を切り裂いたり、メリダの行動化は激しくすさまじいが、それはつまり、メリダにとって母親との絆がそれほどまでに深く、葛藤が強いことの裏返しなのである。娘を受容するうえで母親のあり方を考えさせられる作品である。なおこの作品でも、最後メリダは家に戻り、母と楽しげに馬で駆けている。

#### （5）アナと雪の女王（2013年制作）：母性愛の本質を純粹に示した物語

この映画はエンディングの意外性と挿入歌の楽曲の良さが話題をよび、世界的な大ヒットとなり、2013年度アカデミー賞において長編アニメ映画賞や音楽賞などを多くの賞を得た。アンデルセンの雪の女王にインスパイアされたディズニー独自の創作物語である。あらすじは以下の通り。

エルサとアナは王女で仲のよい姉妹であった。エルサには生来の不思議な能力（触れるものをすべて凍らせる）があるが、子どもの頃、その力が原因で誤ってアナに瀕死の重傷を負わせてしまう。それがトラウマとなり、エルサは部屋に閉じこもり城は閉ざされる。数年後、父母の突然の死によりエルサが王位継承する。アナはそのパーティの場で出会った初対面の王子ハンスと結婚を約束。それに怒ったエルサはコントロールを失い、力が暴走し、国中を凍らせ、北の山に身を隠してしまう。国の窮状を訴えるべく、アナは山男のクリストフ、雪だるまのオラフとともにエルサを訪ねる。しかし、エルサ

の力は暴走し、再びアナは大きなダメージを負う。ハートを氷で傷つけられたアナを救えるのは「真実の愛」のみとトロールに告げられ、「真実の愛」の対象はハンス王子であると考えたクリストフは身を引き、ハンスの元にアナを送り届ける。しかし、王位に目がくらんだハンスはアナを見捨て、エルサを殺して国を自分のものにするると宣言する。一旦城を立ち去ったクリストフは自分こそが「真実の愛」の対象と思い返し城に戻るが、その時ハンスはエルサを剣で切りつけようとしていた。自らが瀕死の状態にもかかわらず、アナはエルサを庇い、ハンスの剣の前に身を晒すがその瞬間凍りつき息絶える。エルサは「真実の愛」がアナの愛と献身にあったことに気づき、ようやく「真実の愛」に目覚める。エルサの涙によりアナは甦り、二人は抱き合う。陰謀を企てたハンスは捉えられ、クリストフはアナと結ばれる。エルサは「真実の愛」を知ること自らの力をコントロールできるようになり、国に太陽と平和が戻る。

この話は臨床心理学的に見れば、エルサのトラウマとそれによる破壊衝動（行動化）からの脱却のプロセスを段階的に示した物語として読むことも可能である。ここではテーマと逸れるため詳しくは述べないが、物語の進行は、①抑圧（城の扉を閉ざし、閉じこもり、手袋で力を隠す）、②解離（問題を解決せぬまま切り離し別の世界に逃避し、問題から離れて安定する（凍った国を捨て、北の山で快適な氷の城を作り一人で安住する)), ③直面化と暴露（凍った国に帰り、自らの問題に直面化する）、④受容による安定化と変容（アナの献身により、エルサは「真実の愛」を認識し、衝動のコントロールが可能となる）というように、トラウマケアのプロセスを踏襲している。最後に氷の結晶が砕け散るシーンは圧巻で、まさにトラウマが浄化、克服される瞬間を象徴的に描いているように見える。さて、この物語の中で、アナの生命を救う条件「真実の愛」とは、瀕死の妹アナ（求める者）に与えられるものではなく、アナ自身が姉に差し出した愛であった。姉妹の物語であるため、この映画は「姉妹愛」を描いたものと理解されている。実際、女性同士の愛が異性愛を超えたという

ような様々な解釈が可能であろう。しかし、この「女性同士の愛」の中身をよく考えると、実はアナの行為は心理学的にみれば「母性的行動」である。愛する者の危機を救いたい一心で自らの生命まで差し出せる態度とは、言い換えれば「母性愛」に他ならない。自分が愛を受ける前に、先に愛を与えている点でもこれは「親の愛」の姿である。(急逝した姉妹の母である王妃の顔が実はアナに瓜二つであると気づいた人はどれくらい存在するだろうか。)  
「母性愛」と言っても、もしこれが母親と娘による話であれば、当たり前すぎて映画にもならないだろう。(ちなみに、「一卵性母娘」という呼称自体、母娘の「姉妹性」を暗喩している。つまり、母娘関係の「永続性」の構成要素として「姉妹性」は想定されうる。)この映画の妙味は、アナ(妹)という家族で最も小さい存在の「母性性(母性愛)」が、強いエルサ(姉)を癒し救う点にある。家族システムに照らせば、一般的に子ども(年少者)は本質的に親(年長者)の役に立ちたいと強く願っているとされるが、この映画は、年少者(妹=子)が年長者(姉=母)を救うという構図のなかで「母性による救い」が母という型にとられず、純粋な形で実現されている。それがこのように多くの人々の心を打ち、共感を得ることにつながったのではないだろうか。そう考えると、異性愛が真実の愛でないわけではなく、母性愛と異性愛は次元が異なり、そもそも比較の対象にならないということであろう。興味深いのは、ちょうど同時期にディズニーで制作された映画『マレフィセント』(制作時期2012年~2014年)(マレフィセントとは、眠れる森の美女に出て来る悪の妖精)においても、「真実の愛」を眠れるオーロラ姫に与えるのは王子ではなく、マレフィセント(映画では継母的存在として描かれている)であった。この一致はディズニー側の何らかの意図によるものか、監督や脚本家など映画コンセプトの決定権をもつ主要ポストに女性がつくようになったことによるものなのか、単なる偶然であるのか筆者にはわからない。しかしいずれにせよ、現代における女性同士(母娘)の結びつきの価値が相対的に高まっていることを示す一例と言えるかもしれない。

神話、および、ディズニー作品における母娘関係を総覧してきたが、これらを通して、①母娘関係の結びつきの強さと分離の難しさ、②母娘間の葛藤から対立が生じた場合、激化する傾向があるが、葛藤や対立が乗り越えられた場合には、本人のみならず周囲（家族）にとっても大きな成果（自由、家の救済、トラウマ解消など）が得られることが理解される。今回、母娘関係を取り扱った「白雪姫」以外の、現代のディズニー4作品では、いずれも主人公は問題解決後、全員「実家」に戻っている。この一致には、筆者自身も驚いた。これら実家に帰る娘の姿からは、問題や葛藤が乗り越えられても、なお母娘の結びつきは強く残り、完全な心理的「母殺し」は難しいことが改めて浮き彫りとなったように思う。そもそも神話において、コレーは嫁いでも実家に戻っている点からすると、現代作品は神話と一致した結末を与えていると言える。歴史に疎い素人の暴論かもしれないが、古来、母と娘の強力な結合の影響（女系）を弱体化するために、家父長制（男系）が生まれ、昔話はその時代の影響を受けて形作られて来たと考えれば、民主主義の現代において、再び神話に示されている原初的な母娘の形に自然回帰する動きが出てきているのだと考えることはできないだろうか。これは本論の範囲を超えるが、まことに興味深い点である。

### Ⅲ. 現象を読み解く視点

#### 1. 母親による娘の支配の心理的メカニズム

女性には、「女らしさ」がもたらす特有の葛藤があると斎藤（2008）は指摘する。つまり、他者から欲望される美しさを獲得することが女性には期待されている（欲望の肯定）が、同時に女性には、自分の欲望を隠し、放棄することが「女性らしい所作」として求められる（欲望の否定）。このギャップが女性特有の葛藤や空虚感、抑うつを生むと言うのである。また、女子の躰は、「女らしさ」という形、所作など、すなわち、身体的同一化を通して母親から伝えられる。それらを前提とし、母親が娘をコントロールするうえで用いる心理的メカニズムとして、斎藤は「抑圧」「同一化」「献身」の3点を挙げている。

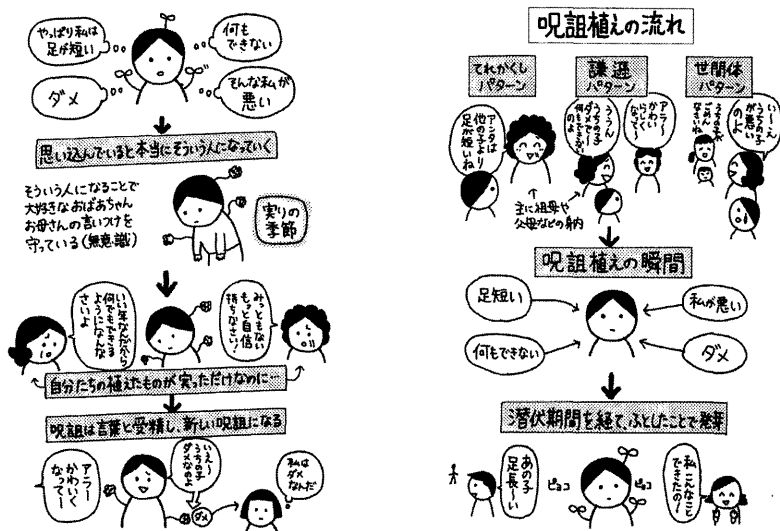


図2. 「母からの呪詛植えと呪詛の世代間伝達」(イラスト・文: 田房永子)  
(高藤・田房他, 2014より転載)

「抑圧」とは、娘への批判など、否定的言動を通して「世間様」の視点を娘にインストールするものである。例えば、「あなたがそんなじゃ、お母さんは世間様に顔向けできないわ」「いつまでも世話の焼ける子ね(嬉しそうに)」「女の子なんだから、もうちょっと身ざれいにしなさい」「そんなじゃ、お嫁に行けないわよ(行っても苦勞するわよ)」「その服はあなたには似合わないわ(趣味が悪いわね)」など、娘を心配して投げかける母親の否定的言動が、娘に自分より他者の視点や判断を優先させる態度を促進する。田房(2014)は、母親からの否定的メッセージを「呪詛植え」と呼び、それがどのように世代間伝達していくかを図に示している(図2)。

「同一化」とは、対象に自分を重ねることである。娘は母親に同一化することで自分の性同一性を獲得していくのであるが、娘側だけでなく、実は母親も娘に自分を重ね、同一化している。これが異性である息子よりも娘に対して生じやすいのは既に述べた通りである。母親は娘に自分を重ね、娘に「自分の生

き直し」を求める。代理走者や人生のリベンジャーとして無意識のうちに娘を利用してしまふことが生じやすい。「あなたには絶対に幸せになってほしいの」と強く願う母親自身、たいいてい人生に不満を多く持っていたりする。「あなたはしっかり手に職をつけなさい」という母親の言もまた、自分がそうできなかった悔恨をその内に秘めている。息子は異性であるため母親は同一化しにくく、息子に自分の人生（女性としての人生）を生き直させたい、などという期待は持ちにくいであろう。

「献身」とは、徹底した他者優先の善意、温情を意味するが、これは母性性の非常に大きな特徴である。母は「夜なべをして手袋編んでくれる」ことを美德とする献身的な存在として描かれる。献身的な母は、「私のことは心配しなくていいのよ」「あなたのことを心配していたのよ」「これ、おいしいのよ、あなたにも食べさせてあげようと思って。ほら美味しいうちに早くおあがりなさい」と自分よりも娘（家族）を優先する。高石（1997）はこのような母親の献身が時として娘（他者）をコントロールする手段となりうるとして、「マゾヒスティック・コントロール」という他者支配の心理メカニズムを提唱した。上記のように、自分を捨てて献身的に尽くす母の姿を見る娘は、その同一化傾向により、やがて「お母さん、こんなにしてもらっているのにごめんなさい」「こんなに尽くしてくれたお母さんを見捨てて私だけ幸せにはなれない」という「申し訳ない」感覚を抱くようになると言う。つまり、マゾヒスティック・コントロールは、恩義を感じさせることで相手の主張を抑制し、相手の献身を引き出す形の他者支配なのである。例えば、自らの不遇と苦勞を娘に語り、娘の同情をひき、娘を「親のポジション」に仕立て、母娘の役割を逆転させ、娘からの献身を引き出す母親がいるとすれば、まさにこのメカニズムを利用している。そして、このような親子役割の逆転が長く固定化されて続く場合、家族は機能不全を呈している。これは、母娘関係のみならず、年齢、性別を問わず、いたるところに見られる他者支配のメカニズムである。例えば、家庭外でも、会社（疑似家族）の上司と部下の関係にも性別を問わず、多くみられるものである。しかし、親子関係に限って言えば、マゾヒスティック・コントロールの

効果は子どものジェンダーによって異なる可能性が高い。息子は母親に同一化しにくいいため、母親の献身を娘よりも「母親の役割」として当然と受け止めやすい。また自分が将来、母親のように献身的に振る舞う役割が期待されているとは考えないため、恩義や愛情を感じはするが、母親が自らの判断で（あるいは母親という役割から自然に）行っているとドライに距離をもって判断しがちである。一方、娘の場合は、同性である母親を未来の自分の姿と捉えやすく、母親の行為をより共感的に「献身」と受け取り、「申し訳ない」と感じやすい（将来自分が母となった時に自らの献身を評価（感謝）されたい気持ちを取っているのかもしれない）。

このように母-娘間には、母-息子間とは異なる心理的力動が生じやすく、母娘関係は複雑な感情的色彩が濃厚になる。さらに、母娘の濃密な関係は外からは理解されにくく、冒頭に述べたように、「とても仲の良い母娘」と「一卵性母娘」の境界は不明瞭である。母の善意は「マゾヒスティック・コントロール」を生む可能性が高いが、「よい母」の重要な構成要素であるため第三者には理解しにくく、母の「善意」を否定する娘は「わがまま」と非難の対象となる。母親の献身は「母として当然の行為」とされ、「それを問題と感じる娘自体がおかしい」と一蹴されてしまう点がこの母娘関係の実態を見えにくくしている。

以上、母親が娘をコントロールするメカニズムについて述べてきたが、最後に母娘関係（特に密着）に困難を覚える場合の対処について考えてみることにしよう。

## IV. 対処 ～母と娘の間に光を差し入れる

### 1. 世代間境界の再構築

母娘関係をめぐる問題への対処は、上述してきたように、母親という役割と不可分な意識化しにくい要素が多いため、基本的に母親の力のみで解決することは難しいと思われる。繰返しになるが、たいていの場合、母親側は娘の成長

や自立への葛藤に気づかず、従来と同じパターンの親子関係を繰り返そうとするため、母娘関係の居心地の悪さや問題に先に気づき、何らかの反応を示すのはたいてい娘の側だからである。ただし、娘も無自覚に「行動化」する 경우가多く、その衝動が母娘関係に起因するかどうかも捉えられていないことが多い。ここで紹介した物語素材に照らして考えれば、母と娘の密着への介入には、他者（たいていは異性）の侵入と何らかの「犠牲」や「痛み」が必要となることが推測される。それを踏まえて、母と娘の「闇」に光を差し入れるための視座を家族システムの観点から探ると、まず挙げられるのは、世代間境界を明確にするということである。母子密着自体、世代間境界が弱い現象を示すものである。その再構築のためには、①家族における父母の夫婦関係の見直し、②母娘間の世代間境界の明確化、の2点が挙げられる。

母子密着には、母親の夫（娘の父親）に対する否定的評価が関係していることが多い（飛田・狩谷, 1992）。母親が夫と良好な関係が持てない場合、母親は娘を自分の理解者と位置づけ、夫婦関係の埋め合わせをするのだ（高木・柏木, 2000）。つまり、夫への不満が娘との密着の背景にある。これは、ボーエンの三角形化（Kerr, M. E., & Bowen, M., 1988）と呼ばれる現象であるが、これが親子の世代間境界（Minuchin, S., 1974）を曖昧にする。Minuchin によれば、家族には世代間境界が適切にひかれていることが重要であるとされ、実際に子どもの不適応や問題行動は、家族の世代間境界が崩れているサインであることが多い。もっとも、世代間境界を明確にするとは、決して世代の間に壁を作るのではなく、むしろ、各世代内（父と母、祖父と祖母など）の横（パートナーの）結びつきを強めることを意味する。つまり、母娘関係ばかりに目を向けるのではなく、母子密着を促す背景となる夫婦関係を見直すことで夫婦関係が改善し、母親が安定すれば、おのずと母親と娘との距離の適正化が図られ、②の母娘間の世代間境界の明確化につながるわけである。しかしながら、夫婦の信頼感が強くとも、母娘という女同士の気がねの無さはやはり母娘（特に母親）にとっては居心地のよいものである。そう考えると互いの境界線を意識化すること、それぞれの責任範囲を明確にすること、そして特に母親は「娘とい



る居心地の良さ」を、娘側は「母親といる都合の良さ」をともに手放す覚悟が必要となろう。幾許かの痛みを伴うが、娘と母の距離の適正化のためには多少の犠牲が必要となるのは仕方がない。さて、父親と母親の関係を見直すと述べたが、これは至難であり簡単なことではない。また、母娘への父親の介入にしても、それが中途半端で母親の不満が解決されない場合、父親は家庭内で異質の存在として逆に孤立し、ただ母娘の結託を強化することに加担しただけに終わるというシナリオも十分考えられる。

## 2. マゾヒスティック・コントロールを意識化する

母親との境界線を見直すべき関係にある娘は、母親に対して、何がしかの強い「申し訳なさ」の感情を感じることが多い。娘の立場にある女性が、自分は「母親への償いの気持ち」や「母親を見捨てるのは申し訳ない」という気持ちが強いと自覚したならば、冷たい言い方かもしれないが、「自分の人生（自立）」と「申し訳なさ（恩義）」は別物であると考える習慣をつけ、「献身は母が好きで（あるいは役割として）自分の責任においてやっていること」と心の中で割り切って考えるのも一つの方法である。（ただし母親の分離不安を刺激しない形で。）先に述べたシステム・コンステレーションの考え方では、親が子に与えるのは親の当然の役割である。しかし、下の世代である子どもは、親から受けたもの（恩義）を自ら親に与え返すことはできないとされる。母から受けた恩義は母にではなく、他者や自分の子どもに与えることで家族関係の秩序は保たれる。つまり家族関係において、子は子としての「分」をわきまえることが家族システム上重要であり、世代間境界はこのような形で保たれる。（これは、決して民主主義を否定するものではなく、家族システム上の役割には違いがあるということを示しているにすぎない。）いずれにせよ、母親が無自覚に行っているマゾヒスティック・コントロールに娘の側が気づき、そのコントロールの無効化を図ることが鍵となるだろう。さらに、娘が母親以外の存在から承認され、受容されることも重要である。まず父親、そして、友人、学校や職場の人間関係、さらに恋人やパートナーに承認される経験を持つことが母親

の価値を相対化し、母親との相違を意識化するうえで有効となるだろう。

## V. おわりに

高石（1997）は女性の自立について、母娘の関係の永遠性の点から言えば、娘は母になっても母娘の関係は切れることがなく、娘が母にとって代わるという形でのイニシエーションが見られないことから、「自立」という言葉に含まれる権力闘争的側面や葛藤自体が母娘には存在しないのではないかと指摘している。さらに「自立」の概念そのものがジェンダーの問題をはらんでいる可能性に触れ、「女性の「自立」とは、あくまで娘でありながら、母から少し距離を置いて夫と暮らすことであり、と同時に母の娘として時折実家に帰って母の世話をすることなのかもしれない」と述べている。本稿でも見て来たように、女性の自立とは、母を打ち負かし、母にとって代わるものではない。問題解決の後、娘は再び自ら母の元に（娘として）帰っていくことから、男性的自立とは異なっていることが伺える。筆者は一卵性母娘を肯定するものではないし、従来の男性的自立モデルがフィットする母娘関係もあるだろう。しかし、強い結合と共生が基本型ともいえる母娘関係を従来の「自立」モデルのみで理解することは難しい。その意味では、今こそ、女性の心の自然な発達プロセスに即した、新しい「自立」モデルが求められるのではないか。「現代の童話」とも言えるディズニーストーリーにおける母娘関係の強調も、従来の男性的自立モデルを超える新しい自立の形を模索する兆しと言えるかもしれない。

## 引用文献

- 原田正文 2006 子育ての変貌と次世代育成支援 一兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会。
- 橋本やよい 2000 母親の心理療法 日本評論社。
- ヘリンガー, B., (著), チェトナ小林 (訳) 2007 愛の法則 親しい関係での絆と均衡 OEJ Books.
- 飛田操・狩谷佳子 1992 両親の「仲の良さ」の認知と親子関係 福島大学教育学部論集, 51, 55-63.

- 藤田ミナ・岡本祐子 2010 青年期後期における娘のとらえる母親との関係性 広島大学心理学研究, 10, 201-216.
- 藤原あやの・伊藤裕子 2007 青年期後期から成人期にかけての母娘関係 青年心理学研究, 19, 69-82.
- Kerr, M. E., Bowen, M., 1988 *An Approach Based on Bowen Theory*. W. W. Norton & Company, New York.
- Minuchin, S., 1974 *Families and Family Therapy*. Harvard Univ. Press. Cambridge.  
(ミニューチン, S., (著) 山田常勇 (監訳) 1984「家族と家族療法」誠信書房.)
- 信田さよ子 1997 一卵性母娘な関係 主婦の友社.
- 斎藤環 2008 母は娘の人生を支配する NHK 出版.
- 斎藤環・田房永子他 2014 母と娘はなぜこじれるのか NHK 出版.
- 高木紀子・柏木恵子 2000 母親と娘の関係：夫との関係を中心に 発達研究 15, 79-94.
- 高石浩一 1997 母を支える娘たち ナルシズムとマゾヒズムの対象支配 日本評論社.
- 渡辺恵子 1997 青年期から成人期にわたる父母との心理的關係 母子研究, 18, 23-31.
- 渡辺恵子 2004 母親と娘はなぜ親密化—青年期から成人期にかけて— 柏木恵子・高橋恵子 (編) 心理学とジェンダー：学習と研究のために 有斐閣.